

長岡市立中央図書館文書資料室所蔵の往来物 —横山家文書からの報告—

Investigation report on "OURAIMONO" documents of Nagaoka City Library possession : A study of documents transmitted to the YOKOYAMA Family

郡 千寿子*
Chizuko KOHRI*

要 旨

新潟県の長岡市は戦時中の空襲火災により、長岡駅近くの中心市街地とその周辺は、全滅に近い被害を受けたため、古い文献資料は残存していないと推測されたが、今回の調査で資料保存の一端を明らかにすることができた。本稿では、長岡市立中央図書館文書資料室所蔵の「横山家文書」の中から、近世期版本の往来物資料に該当すると判断した10本について、書誌含め概要を画像とともに紹介した。

調査の結果、目的別の分類では、消息科往来が3本、教訓科往来が1本、産業科往来が2本、理数科往来が2本、歴史科往来が1本、女子用往来が1本という結果であった。出版地域別の分類では、江戸が7本で最も多く、京都は1本、不明が2本という結果であった。

往来物資料の所在調査を通して、地域の教育的背景の格差や文化伝播状況などの解明を目的としているが、他地域の状況と比較する上で基盤となりうる調査の一報といえるだろう。

キーワード：新潟、長岡、往来物、言語生活、横山家文書、

1. 研究の背景について

近世期以降に出版された往来物資料を通して、実生活にどのようにそれらの文献資料が関わっていたのかの具体像を探ることを目的に研究¹⁾をすすめている。往来物は、寺子屋などで手習いのために使用された教科書の類の総称であるが、近世期には様々な種類のもものが出版された。従来の往来物研究は、教育史資料という側面からなされてきたが、日本社会の近代化や人間文化形成に果たした役割や影響など、多くの未開拓課題が残存し、新たな視点からの活用が期待されている。

しかし、文献資料の基礎的研究をはじめとして、発掘も十分にすすんでいない現状にあり、そうした事情を背景に、東北地域の往来物資料についての調査研究²⁾をすすめてきた。現在、東北地域と海域でつながり、近世期に関西とも文化交流など関係が深かったと予測される、北陸地域にも調査対象を拡げている。地域間

格差や文化伝播事情など研究の進展を目指し、富山地域における、富山県立公文書館と高岡市立中央図書館の調査報告³⁾に加えて、新たに本稿では、新潟県の長岡市立中央図書館文書資料館所蔵の資料「横山家文書」⁴⁾について報告する。

2. 長岡市立中央図書館と「横山家文書」について

長岡市立中央図書館の文書資料室は、郷土の歴史資料を未来に伝えるため、市域の古文書や関係する図書・歴史公文書などを収集・保存している。新潟県の長岡市は、戦時中の空襲火災により、古い文献資料は残存していないと推測されたが、今回の調査で資料保存の一端を明らかにすることができた。

「横山家文書」は、「反町茂雄文庫」に所蔵される資料群である。「反町茂雄文庫」は、長岡市立中央図書館に故反町茂雄氏（長岡市神田町出身）から寄贈された郷土資料1,592点と反町氏からの寄付で図書館が収

*弘前大学教育学部国語教育講座

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

集した資料1,421点をあわせて誕生した特殊文庫である。反町氏は、東京大学法学部卒業後、古書業界に入り、古典籍・善本稀覯本の発掘や評価にかかわり、歴史・国文学の研究に貢献された方である。

「反町茂雄文庫目録」を参考に往来物資料を探索したところ、「横山家文書」に調査対象の該当資料が存在することが判明した。横山家は、古志郡宮下村に所在し、近世当時、長岡藩領北組に属していた。庄屋役は代々、太郎兵衛（横山氏）と称し、幕末には割元格となったという。「横山家文書」は、横山家旧蔵の資料群である。蔵書からは、当時の庄屋層の教養の高さがうかがえ、文化的教育的背景が知られるが、ここでは、近世期の往来物資料に限定して紹介する。

東北地域における所蔵往来物の調査にならば、原則として、写本は除き、版本に限って成立時期や出版元を確認した。調査対象の資料それぞれについて、目的別と出版地別に分類整理⁵⁾して、地域ごとの特徴について今後考察検討したいと思うが、写本を除いたのには意味がある。本研究の大きな目的のひとつは、地方における近世期の庶民生活について、出版文化を通して考えてみることである。写本は、その資料の内容を知るには重要な資料であるが、どこでどのような文献が出版され、それがどのような場所で使われてきたか、文化や教育の流通状況⁶⁾を解明するためには、版本の方がより大きな資料的価値をもつと考えたからである。

基本的には、従来の調査手法を踏襲し、調査対象の往来物資料を厳選し、分類整理を試みた。現物資料調査において版本であるか写本であるかを確認し、文献資料の所在や記載内容については、『国書総目録』⁷⁾および『古典籍総合目録』⁸⁾によっても検討した。

3. 横山家文書の該当資料について

研究対象となりうる該当資料として、「横山家文書」に10本の往来物資料の存在を確認し、現物調査を実施したが、本稿では、書誌情報と合わせて一部画像を提示して紹介する。調査の結果、版本は、以下に紹介する10本であった。また写本では、『本朝千字文』といった語彙科往来資料、『古状揃』といった歴史科往来資料も確認できた。

目的別に分類してみると、消息科往来が3本、教訓科往来が1本、産業科往来が2本、理数科往来が2本、歴史科往来が1本、女子用往来が1本という結果であった。出版地域別分類では、それら10本のうち、7本が江戸、1本が京都、2本は不明という結果

であった。写本の『本朝千字文』や『古状揃』を含めて考えると、消息科、教訓科、産業科、理数科、歴史科、女子用、語彙科と多彩な分野の文献資料が所在していることが知られるのであった。

① 算法地方指南 全一冊

- 〈資料番号〉18
- 〈表紙〉薄青色
- 〈形状〉横16.2 縦23.0
- 〈丁数〉全50丁
- 〈出版〉江戸
- 〈分類〉理数科往来



① 「算法地方指南」(表紙)

『国書総目録』には記載がないが、『古典籍総合目録第一巻』(400頁)に「算法地方指南」とある。種類は「和算・経済」、著者は「長谷川寛 村田恒光編」、成立は「天保七年刊」で版本所蔵は、「天保七年版」を玉川、東京学芸大、横浜市大、茨城歴博の4か所に所蔵がある。本資料も、成立年や著者名が該当し、同種のものであると確認できる。

版心(袋綴の中央折目)の「算法地方指南 一」から「四十四」までが本文であり、「蔵板目録 一」から「五」までが序文1丁で、最後の宣伝部分5丁、本文44丁で全50丁である。表紙裏に「長谷川善左衛門寛 村田佐十郎恒光編 算法地方指南 江戸書肆 千鐘房 北林堂 合梓」、2丁表に「算法地方指南 伊賀 村田佐十郎平恒光編」とあり、編者の「村田」が「伊賀」の人であることが知られる。

45丁裏に「天保六乙未年十一月官許 同七年丙申年二月発行」とある。書肆については、京都一軒、大坂一軒、江戸三軒の5軒「京寺町通松原下ル 勝村治右衛門、大坂心齋橋安堂寺町 秋田屋太右衛門 江戸神田鍛冶町二丁目 北順十四郎 江戸日本橋通壱町目

須原屋茂兵衛 江戸中橋廣小路町 西宮弥兵衛」が列挙されている。蔵板は表紙裏にあったように江戸である。最後の5丁には「北林堂蔵板目次 江戸中橋廣小路町 西宮弥兵衛」につづき、「算法新書」「算法極形指南」「算法変形指南」「算法求積通考」ほか25種もの書物の紹介がなされている。

②実語教童子教 全一冊

〈資料番号〉19

〈表紙〉茶色の形跡あり

〈形状〉横16.0 縦23.0

〈丁数〉全20丁

〈出版〉不明

〈分類〉教訓科往来



②「実語教童子教」(表紙)

『国書総目録 第4巻』(124頁)に多数所在が確認でき、広範囲で普及していた往来物である。「実語教」は平安末期、「童子教」は鎌倉前期に成立したと推定され、室町前期頃に「実語教童子教」の合冊本が成立したといわれている。

本資料は、表紙は茶色だった形跡があるが、題箋はない。落書きが多数見られ、使用の痕跡が確認できる。全20丁で、20丁裏に「元禄二年巳五月吉辰日」とあり、5丁まで角書に「実語教 一」から「実語教 五」、6丁目からは角書に「童子教 六」から「二十」とあり、当初から「実語教」と「童子教」の合冊本であることが知られる。落書きで「横山」と所蔵者の姓が記載されており、人の顔や侍らしき顔の絵が描かれていることも確認できた。

③商売往来 全一冊

〈資料番号〉22

〈表紙〉薄青色

〈形状〉横18.0 縦24.6

〈丁数〉全13丁

〈出版〉江戸

〈分類〉産業科往来



③「商売往来」(表紙裏・1丁表)

『国書総目録 第4巻』(481頁)に記載があり、当時、多種多数刊行された「商売往来」である。題箋はないが、表紙に直に「商売往来 商売往来平綴名附」とある。全13丁。角書「商売往来 一」から「商売往来 十三」とあり、14丁目、つまり裏表紙の裏部分に「江戸地本九軒問屋元祖 西村屋傳兵衛版 永壽堂 江戸馬喰町式丁目角 西村屋興八再版」とある。裏表紙がはがれており、侍の絵と「小川亀吉主」との落書きが確認できる。裏表紙に「横山氏」との所有者名も確認できるが落書きか所有者が記載したものかの判別は不能である。使用実績の痕跡がある資料として興味深い。

④世寶塵却記大成 全一冊

〈資料番号〉28

〈表紙〉薄青色の形跡あるが劣化により黄土色

〈形状〉横16.0 縦22.6

〈丁数〉全51丁

〈出版〉京都

〈分類〉理数科往来



④「世寶塵却記大成」(1丁裏・2丁表)

『国書総目録』『古典籍総合目録』にも記載の見られない書名である。別の理科数科往来資料であるが、類書とみられる『塵却記』は、1627(寛永4)年、京都の吉田光由蔵版で初版された三巻三冊の大本で、最も広く長く普及した算書として著名である。

本資料は、表紙は薄い青色だった形跡が見られるが劣化によってほとんど黄土色に見える。2丁表に「世寶塵却記大成」と内題がある。現在残っている2丁目部分の版心に「世寶ぢんかうき ○一ノ六」と確認できる。つまり、この版心によって、現存「2丁目」が本来は「6丁目」(6頁め)にあたると思われる、落丁があったものと推測できる。また、3丁目には「智恵車大全 ○七」とあり、丁数や書名との不一致が確認できる。実際に丁数を確認したところは全51丁である。

最終丁部分の版心には「智恵車大全 ○七十八」とあり、ここでも丁数や書名が一致しない。落丁か綴じ間違いの可能性もある。裏表紙裏には、「明和三丙戌歳 四月吉日 京寺町忝原上ル 菊屋七郎兵衛版」とあり、江戸出版が多いなかで、唯一の京都出版であることが知られる。

⑤庭訓往来・実語教・童子教 全一冊

〈資料番号〉33

〈表紙〉破損して題箋もなし

〈形状〉横18.0 縦25.8

〈丁数〉全82丁

〈出版〉不明

〈分類〉消息科往来



⑤「庭訓往来・実語教・童子教」(表紙裏・1丁表)

「目録」では、「庭訓往来・御成敗式目・実語教・童子教」となっていたが、内容確認したところ、「庭訓往来」「実語教」「童子教」「今川状」の合冊本であった。表紙は破損して題箋もないため、題名も不明である。直に落書きが多数確認できる。60丁までが「庭訓往来」、61～74丁まで「実語教」、82丁までが「童子教(今川状など)」であり、「庭訓往来」に代表させて「消息科」とした。裏表紙裏に「庭訓状 成敗式目 実語教 童子教」と薄い墨書きの字で書き込みがある。他に大きく濃い墨書きで「小状揃 平仮名」と書き込みが確認できる。

⑥庭訓往来文寶蔵 全一冊

〈資料番号〉34

〈表紙〉薄青色 題箋あり

〈形状〉横18.0 縦25.0

〈丁数〉全51丁

〈出版〉江戸

〈分類〉消息科往来



⑥「庭訓往来文寶蔵」(表紙)

「目録」では「庭訓往来」となっていたが、薄い青色の表紙に題箋があり、「庭訓往来文寶蔵」との題名として整理した。題箋も当初からのものと推定される。中身は「庭訓往来」の異種本と解される。表紙裏に「和朝文範 庭訓往来」「東都書林 西村永壽堂梓」とある。2丁に前書き序があり、3丁目以降は庭訓往来の本文である。全51丁。裏表紙裏(52丁表)に「寛政十一巳未八月再板 元祖 西村屋傳兵衛 書林 江戸馬喰町貳丁目 永壽堂 西村屋與八再発」とある。

『国書総目録』には記載が見られないが、『古典籍総合目録 第2巻』(140頁)に「庭訓往来文宝蔵」とあるものに該当すると思われる。「寛政十二年版」が玉川と東京学芸大に、「天保三年版」が弘前に所蔵されているとあるが、本資料は「寛政十一年版」であり貴重なものと思われる。

⑦筆徳用文袖鏡 全一冊

〈資料番号〉44

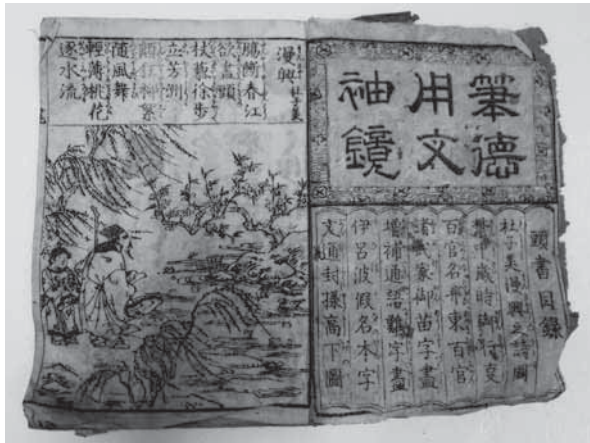
〈表紙〉薄青色 題箋あり

〈形状〉横12.8 縦18.0 懐中版

〈丁数〉全15丁

〈出版〉江戸

〈分類〉消息科往来



⑦「筆徳用文袖鏡」(表紙裏・1丁表)

『国書総目録 第6巻』(774頁)と『往来物解題辞典』に記載がみられる資料であるが、同種のものかどうか不明。本資料は「天明三年刊」であり、『国書総目録』では版本所蔵が「天明三年版」は東大、東北大狩野、石川謙の3か所、「文政元年版」は、教大1か所と記載がある。『古典籍総合目録』では、東京学芸大に「天明三年版」の所蔵が記載されている。

『往来物解題辞典』によれば、「作者」は不明で、「天明3年」(1783)刊行とあり、「江戸村田屋治郎兵

衛板」と記載がある。刊行年と出版元という点では、本資料と合致がみられるが、大きさについては「中本一冊」とあり、本資料が小型である点で相違している。

表紙は、薄い青色。小型のものでいわゆる懐中版。全15丁で表紙裏に「筆徳用文袖鏡」と内題および「頭書目録」がある。絵入である。裏表紙裏部分に「天明三歳癸卯三月吉日 江戸本問屋 通油町北側 栄色堂 村田屋治郎兵衛」とある。裏表紙に直書きで「宮下村横山」と所有者名と思われる記載が確認できる。

⑧百姓分量記 全五冊

〈資料番号〉45

〈表紙〉薄紺色 題箋あり

〈形状〉横15.8 縦22.5

〈丁数〉1巻全23丁、2巻全23丁、3巻全20丁、4巻全22丁、5巻全16丁

〈出版〉江戸

〈分類〉産業科往来



⑧「百姓分量記一～五」(表紙)

『国書総目録 第7巻』(607頁)に見られる「民家分量記」の資料に該当するものと思われる。『国書総目録』には、別名「百姓分量記」とあり、種類「教訓」、著者「常盤貞尚」、成立は「享保六成、同十一刊」とある。

『古典籍総合目録 第2巻』(395頁)に「享保十一年版」の所蔵先として、和歌山に5巻5冊の完本が、弘前は欠本があるが四冊を所蔵、「安永六年版」の完本が玉川と栃木黒崎、東京学芸大に欠本の一冊、との記載がある。

本資料も五巻五冊であり、完全に残存しており、「享保十一年」刊であることが確認される。『国書総目録』によれば、写本は「内閣(二巻二冊)、京大(五

卷一冊)、早大(一冊)」等、完本での所在はない。「享保十一年刊」のほか、「安永六年版」と「刊年不明」の資料がある。「享保十一年刊」の資料の所蔵先は、「静嘉・京大・教育・東大」のほか6か所である。

本資料の所在紹介は初めてであるが、地方の家庭で実際に使用されていたことの証であり、また教養の背景を知る資料として大変貴重であるといえるだろう。

1巻は全23丁で、版心に「民分量記巻序 〇一」～「〇三」「民分量記巻目録 〇一」～「〇三」、「民分量記巻一 〇一」～「〇十七」とある。表紙は薄い紺で、1巻だけがほかの4巻4冊と比して色落ちが激しく劣化している。裏表紙裏に「五冊之内」と手書きがある。2巻～5巻の表紙は同じくらいの劣化で薄い紺色である。表紙に直書きで「百姓分量記巻口」(2巻は表紙が一部破損して判読不能)とある。2巻は全23丁で「民分量記巻二 〇一」～「〇二十三」とある。

3巻は全20丁で「民分量記巻三 〇一」～「〇二十」、裏表紙裏に「五冊之内 横山順則」と手書きの署名が確認できる。4巻は全22丁で、「民分量記巻四 〇一」～「〇二十二」、裏表紙裏に「五冊之内 横山氏」とある。5巻は全16丁で、「民分量記巻五 〇一」～「十三」、民分量記巻 〇」と3丁分のあとがき部分が存在する。

5巻裏表紙裏(最後の部分)に「享保十一丙午歳八月吉日」と成立(刊行)が確認できる。出版に関しては、「京都書林 六角通烏丸西江入町 西村市郎右衛門」「東都書肆 本町三丁目 西村源六蔵版」と並列で書かれている。「彫工 江戸豊島町 栗原次郎兵衛」の記載が確認できるため、出版は「江戸」とした。

⑨ 富士野往来

〈資料番号〉46
 〈表紙〉薄紺色 題箋あり
 〈形状〉横17.4 縦26.4
 〈丁数〉全27丁
 〈出版〉江戸
 〈分類〉歴史科往来



⑨「富士野往来」(1丁裏・2丁表)

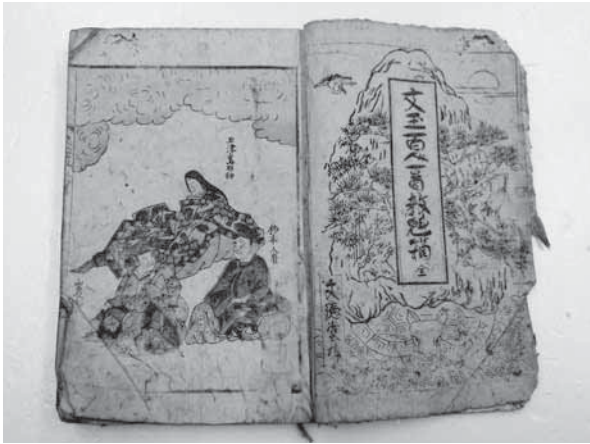
『国書総目録』には記載が見当たらないが、『古典籍総合目録 第2巻』(306頁)に「富士野往来」が見られる。『古典籍総合目録』によれば、写本は東京学芸大と日大にあり、版本としては、「延宝七年版」が日大、「天和二年版」が弘前、「天明四年版」が玉川、「文化元年版」が東京学芸大、日大、久留米に所蔵がある。本資料は「天明四年版」であり、玉川に所蔵があるのみの資料であり、貴重なものであると知られる。全27丁で版心に記載はない。

裏表紙裏(最後の部分)に「天明第四星次甲辰春三月吉穀 筆工 東武市 白馬山誌」「東都書肆 御江戸地本九軒問屋 元祖 西村屋傳兵衛 馬喰町二丁目角 同興八開版」とあり、出版は江戸である。

『富士野往来』は、古往来と呼ばれる室町前期に作成された貴重な往来物資料であり、歴史科往来の先駆といわれている。古写本および江戸初期刊本の多くが大本一冊である。鎌倉時代初期に行われた富士野巻狩と、そこで起こった曾我兄弟の仇討ちを題材にした文書・書簡を集めた古往来である。

⑩ 文玉百人一首教魁箱

〈資料番号〉199
 〈表紙〉白色 題箋なし
 〈形状〉横16.0 縦23.2
 〈丁数〉全51丁
 〈出版〉江戸
 〈分類〉女子用往来



⑩「文玉百人一首教魁箱」(1丁裏・2丁表)

『国書総目録』および『古典籍総合目録』にも記載のない資料である。表紙は白色で、全51丁。ただし、丁数記載は「文玉百人一首五十」とあり合致していない。一冊本である。最終丁の51丁裏に「文玉百人一首教魁箱全 東都 龍魁重蕃谷 東都 廣貢齋南華 歌劇 竹内熊次郎 大坂書肆 河内屋茂兵衛 河内屋藤兵衛 秋田屋市兵衛 河内屋源七 加賀谷善蔵 江戸書肆 岡田屋嘉七 和泉屋新兵衛 山城屋佐兵衛 大和屋善兵衛 小林新兵衛 須原屋茂兵衛 出雲口萬次郎 和泉屋金右衛門 田中喜三郎 辛亥年 書林製本 大傳馬丁二丁目 丁子屋平兵衛 北新堀 竹内伊助 新橋竹川丁 岩本忠蔵」とある。書肆は、大坂と江戸が多数列挙されているが、製本が江戸であるため、江戸の出版とした。

確認できた唯一の女子用往来資料であるが、『国書総目録』『古典籍総合目録』にも記載がなく貴重な珍しい資料であると思われる。

4. まとめにかえて

新潟県の長岡市立中央図書館文書資料室の目録を参考にして近世期版本の往来物の所蔵について調査を実施した。該当資料を選別し、本稿では、「横山家文書」の資料について紹介した。

調査の結果、目的別の分類では、消息科往来が3本、教訓科往来が1本、産業科往来が2本、理数科往来が2本、歴史科往来が1本、女子用往来が1本所蔵されていた。出版地域別分類では、それら10本のうち、7本が江戸、1本が京都、2本は不明という結果であった。

写本を含めて概観すると、『本朝千字文』といった語彙科往来資料、『古状揃』といった歴史科往来資料も確認でき、目的別分類における偏在は少なく、多彩

な種類の往来物資料が所蔵されていたことが知られる。また実際に横山家で使用されていたことが確認できるという点でも貴重である。

これらの往来物資料を通して、地域の教育的背景や文化基盤の一面をうかがい知ることができるといえるだろう。北陸地域における、富山県立公文書館や高岡市立中央図書館の調査結果³⁾に加えて、重要な調査報告の一報であり、地域間での共通性や格差等、今後も検討考察を続けたいと思う。

注

- 1) 拙稿「弘前市立図書館所蔵「往来物」について—関西文化との関係から—」(『関西文化研究叢書別巻 往来物の研究 第1輯』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2006年3月)、拙稿「弘前市立図書館蔵『都花月名所』考—近世期の京都観—」(『関西文化研究叢書別巻 往来物の研究 第3輯』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2007年3月)、拙稿「往来物の「女ことば」について」(『関西文化研究叢書 10巻』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2008年11月)、拙稿「近世期における「御所ことば」の記載について—東京大学総合図書館蔵「往来物分類集成」からの報告—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第104号、2010年10月)、拙稿「国語資料としての『都花月名所』—江戸時代後期における漢字表記と振り仮名—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第106号、2011年10月)、拙稿「『南都名所記』についての一考察—山形県立博物館教育資料館所蔵本の資料性—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第110号、2013年10月)等参照。
- 2) 拙稿「岩手県立図書館所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第100号、2008年10月)、拙稿「八戸市立図書館 旧遠山家所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第102号、2009年10月)、拙稿「秋田県立図書館所蔵の往来物資料について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第103号、2010年3月)、拙稿「酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料—目的と出版地からの分類分析—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第107号、2012年3月)、拙稿「山形県立博物館教育資料館所蔵の往来物資料—目的別分類からの考察—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第108号、2012年10月)、拙稿「山形における江戸時代の書籍流通について—往来物資料の出版地域からの検討—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第109号、2013年3月)、拙稿「秋田県立図書館所蔵往来物の出版地域に関する一考察—弘前・酒田・山形との比較検討—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第111号、2014年3月)等参照。
- 3) 拙稿「富山県立公文書館所蔵の往来物資料について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第114号、2015年10月)、拙稿「高岡市立中央図書館所蔵の往来物資料について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第116号、2016年3月)参照。

- 4) 長岡市立中央図書館編『反町茂雄文庫目録 第一集 越佐文人の軌跡』(北越印刷株式会社、2004年)、小川和也「村役人の蔵書と藩政—越後長岡藩の割元・横山家を事例に一」(『書物・出版と社会変容』研究会編『書物・出版と社会変容』第8号、2010年)、小川和也「天明期越後長岡藩の藩政改革と農書—読書による藩家老の政治構想—」(歴史科学協議会編『歴史評論』第664号、2005年8月)等参照。
- 5) 分類については、石川松太郎著『往来物の成立と展開』(雄松堂、1988年)、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 解題編』(大空社、2001年)、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 図版編』(大空社、2001年)を参考とした。
- 6) 長友千代治著『江戸時代の図書流通』(思文閣出版、2002年)、鈴木俊幸著『江戸時代の読書熱』(平凡社、2007年)、市川寛明・石山秀和著『江戸の学び』(河出書房新社、2006年)等参照。鈴木俊幸氏のご研究によれば「寛政期(1789~1801)を境にして、知と情報のありようが大きく変化していくように思われる。」(『江戸時代の読書熱』(平凡社、2007年)17頁参照)という。

- 7) 『国書総目録 第1~9巻』(岩波書店、1963~1976年)参照。
- 8) 『古典籍総合目録 第1~3巻』(岩波書店、1990年)参照。

【付記】

貴重な文献資料の閲覧や撮影、ならびに掲載許可をいただくなど、研究にご協力とご助力をいただいた、新潟長岡市立中央図書館文書資料室の関係者各位に心より感謝申し上げます。文書資料室長の田中洋史氏には、関係の研究論文等についてご教示いただくなど大変お世話になりました。記して謝意を表します。

本稿は、科学研究費助成事業 JSPS KAKENHI (基盤研究 (C) 課題番号15K02555) の助成を受けた研究成果の一部です。

(2017. 8. 1 受理)